



第20回

日本抗加齢医学会総会

プログラム・抄録集



人生
100
年
時
代
の

ア
ン
チ

エ
イ
ジ
ン
グ

Healthy Aging for All



会 期

2020年9月25^{FRI}日-27^{SUN}日

会 場

WEB開催 (一部会場開催)

※東京・浜松町コンベンションホール & Hybrid スタジオ
ライブ配信・オンタイム配信・オンデマンド配信

会 長

南野 徹



シンポジウム 18

歯科・口腔領域における最新トピックスとテクノロジー

14:20 ~ 15:50

座長：齋藤 一郎（鶴見大学歯学部病理学講座）

美島 健二（昭和大学歯学部口腔病態診断科学講座口腔病理学部門）

- SY18-1 歯科医療におけるボトックスは是か非か
松香 芳三（徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野）
- SY18-2 舌痛症（Burning mouth syndrome）は本当はどう診る？—最近の知見から—
安彦 善裕（北海道医療大学歯学部生体機能・病態学系臨床口腔病理学分野）
- SY18-3 デジタルテクノロジーを活用した顎顔面外科の現状
高野 正行（東京歯科大学口腔顎顔面外科学講座）
- SY18-4 睡眠時ブラキシズム Update, From bench to clinic
馬場 一美（昭和大学歯学部歯科補綴学講座）

シンポジウム 22

動物のエイジングから学ぶヒトのエイジング、共通点と相違点

16:00 ~ 17:30

座長：新村 健（兵庫医科大学内科学総合診療科）

池嶋 健一（順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学）

- SY22-1 動物におけるアンチエイジング
鯉江 洋（日本大学生物資源科学部獣医生理学/獣医病態生理学研究室）
- SY22-2 しなやかな異種共生社会を営むためのペット・フレイルに対する獣医療の展開
水野 理介（岡山理科大学獣医学部獣医学科獣医薬理学）
- SY22-3 動物における心不全（イヌの心不全を中心に）
小山 秀一（日本獣医生命科学大学獣医内科学研究室）
- SY22-4 脳老化の比較病理学
中山 裕之（東京大学名誉教授）

9月26日（土） 第6会場（6階 大会議室B）

専門医・指導士共通プログラム 1

Medical monitoringの進歩

9:00 ~ 10:30

座長：齋藤 英胤（慶應義塾大学薬学部薬物治療学）

新村 健（兵庫医科大学内科学総合診療科）

- SIP1-1 ウェアラブル生体センサを用いた活動モニタリング
向野 雅彦（藤田医科大学医学部リハビリテーション医学I講座）
- SIP1-2 持続血糖モニタリングの有用性
上芝 元（東邦大学医療センター大橋病院糖尿病代謝内科）
- SIP1-3 バイオセンサーを用いた日常人間ドック
井上（安田）久美（山梨大学大学院総合研究部、東北大学大学院環境科学研究科）
- SIP1-4 IoTや機械学習を用いた精神科領域における新しい試み
岸本泰士郎（慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室）

シンポジウム22

9月26日(土) 第5会場 (6階 大会議室A)

動物のエイジングから学ぶヒトのエイジング、共通点と相違点

16:00 ~ 17:30

座長：新村 健 (兵庫医科大学内科学総合診療科)

池嶋 健一 (順天堂大学大学院医学研究科消化器内科学)

SY22-1

動物におけるアンチエイジング

○鯉江 洋

日本大学生物資源科学部獣医生理学 / 獣医病態生理学研究室

ほとんどの動物は人間と比べると寿命は短い。しかし我々の身近の伴侶動物である犬猫の寿命は、近年の臨床獣医学の進歩により飛躍的に延びてきている。その背景には、小動物臨床技術が人医学に追随して発展してきていることがあげられる。その理由として動物のオーナーは人と同じレベルの治療を望むケースが多いからである。

近年、人の健康維持と増進のために多数のサプリメントが存在し、年々その需要は増加しているのは周知のとおりである。小動物臨床分野においても、人と同じく動物の健康維持と増進を目的としたサプリメントが数多く発売されている。当然のことながら、ペットオーナーならびに獣医師は人と同様の効果を期待している。本講演ではその中でも最近注目されているサプリメントを紹介する。

犬や猫にも関節疾患や運動機能障害は存在する。加齢により変形性関節症、椎間板ヘルニア、関節炎などや筋力低下も一般的にみられる。動物に対してもコンドロイチンやグルコサミンなどが使用され、炎症に対してはオメガ3脂肪酸などの投与も実施されている。またモエギイガイ抽出脂肪酸も効果が高いとされている。腫瘍疾患に対しては、アガリスク、タヒボ(アマゾン川流域樹木)などが与えられている。犬や猫は被毛の障害も高頻度で認められる。これら被毛状態の改善を目的として、コラーゲンやLPS(リポポリサッカライド)などが与えられている。

また演者はピクノジェノール(フランス海岸松樹皮抽出物)を循環器疾患の動物に投与を行い、その効果を確認するために試験を実施している。本講演ではこれらを中心に講演を行いたいと思う。さらにペットオーナーに対してサプリメントを薦めるタイミングや薬剤との併用ならびにこれらに伴う問題点などを取りあげたいと思う。

SY22-2

しなやかな異種共生社会を営むためのペット・フレイルに対する獣医療の展開

○水野 理介¹、岩田 恵理²、樋渡 敬介³、土井 公明⁴¹岡山理科大学獣医学部獣医学科獣医薬理学、²岡山理科大学獣医学部獣医学科行動治療学、³御殿場インター動物病院、⁴どいペットクリニック

日本は、世界において比類なき長寿民族国家であり長寿に伴う諸問題に直面している。その中でヒトを取り巻く環境因子としてペットの果たす役割が最近急激に変化してきている。事実、日本の15歳未満子供の数は1553万人(2018年総務省)、ペットとして飼われているイヌ・ネコ合わせて1857.5万頭であり、日本では子供の数よりペットの数のほうが圧倒的に多い(2019年日本ペットフード協会調べ)。すなわち、動物は古来の使役動物(番犬・猟犬・害獣駆除など)からペットとして家族の一員となりつつある(異種共生社会: 様々な動物種が時空間的に共存する社会構造)。近年、ペットも超高齢化が急激に進み寿命は30年で倍に伸長している(平均寿命イヌ: 14.44歳、ネコ: 15.03歳)。その結果、長寿に関わる様々な課題(サルコペニア・フレイル・認知症様症候群など)が提示されている。ペットの生活は、大部分飼い主に依存しているため、超高齢疾患を有するペットの治療・介護において飼い主に精神的・肉体的・経済的負担を強いることがある。我々は、超高齢ペットのフレイルを軽減することによって、ペットのみならず飼い主の負担軽減を目的とした獣医療を実践している。今回は、1) ペットの長寿に伴う複合的症状(転倒・沈鬱・歩行困難など)にアンジオテンシンII受容体拮抗薬を投与し、症状の改善と介護期間の短縮を可能とした症例、2) イヌの認知症様症候群で起こる昼夜逆転「夜鳴き」にオレキシン受容体拮抗薬を投与し、症状が改善した症例を紹介する。そして、これらペット長寿に伴う獣医臨床例からヒトのエイジングとの共通点・相違点を検討する。